コンクリートで「命守れ」

JCI中部と北陸3県診断士会 フォーラム開催

大石久和理事長

石川裕夏代表

日本コンクリート工学会（JCI）中部支部と北陸三県コンクリート診断士会は11月30日、福井市の福井県繊協ビル8階ホールでフォーラム「あの大震災から何を学ぶのか？～東日本大震災とこれからのコンクリート技術」を共催し、約140人が聴講した。コンクリート技術者の観点から東日本大震災の教訓を明確にし、今後の対策につなげていく試み。特別講演では元国土交通省技監の大石久和国土技術研究センター理事長が「レジリエントな国土の創造へ―大震災を経て問われる日本人の覚悟」と題して特別講演した。

大石理事長は「わが国にはコンクリートによってしか守れない人の命がある。それほどまでに厳しい自然災害がある。また、コンクリートを使うことによってしか実現できない生活の質、快適性がある。しかるにわが国は、過去20年間にわたって経済政策を誤ってきた」と述べ、豊富なデータ・資料を用いて、デフレ不況下での公共投資抑制は事態改善に結びつかず、「財政状況が厳しくても公共事業の拡大、社会資本の充実に努め、経済成長を達成している世界の趨勢とは正反対に突き進んでいる」と指摘した。

また、「少子高齢化は経済が成長しない言い訳にはならない」とし、一国の経済力は労働生産人口×一人当たりの労働生産性でほぼ計られることから、単に公共事業に期待するだけでなく、産業界も意欲と能力のある女性、高齢者、障害者が働きやすい環境を整備する努力をすべきとした。

このほか、土木分野では西垣義彦プレストレスト・コンクリート建設業協会技術部会部会長が、「東日本大震災で被災したPC橋の調査報告とこれからの対策」、建築分野では磯雅人福井大学大学院准教授が「東日本大震災による建築構造物の被害状況とこれからの対策」について講演。山田一夫国立環境研究所資源循環・廃棄物研究センターフェローは「コンクリートを用いた放射性物質の封じ込め技術と今後の展望」について語った。

主催者を代表して開会の挨拶を行った石川裕夏北陸三県診断士会代表（福井県診断士会会長）は「東日本大震災の被害に直面し、われわれの扱っているコンクリートという材料は人の命を守っていくために欠くことのできないものだと改めて確信した。この震災を経験した日本こそが、世界に先駆けて災害に強い国になるよう努めるべきであり、われわれもその一翼を担っていかなくてはならない」と述べた。